私達の活動地域は多民族・多宗教の人たちが平和に共生しています（ムスリムの正装で卒業式に臨むチボリの里子担当アーミアさん）

ビラーン通信 92号

2018年1月25日発行

NPO法人ビラーンの医療と自立を支える会
（英文名略称・ＨＡＮＤＳ）
本部：〒227-0033 横浜市青葉区鴨志田町516-11
TEL & FAX:045-500-9151
E-mail: hands-mindanao@nifty.com
http://hands-mindanao.a.la9.jp/
郵便振替口座　00210-5-72693
（加入者名）ビラーンの医療と自立を支える会

多民族、多宗教の地ミンダナオでの支援活動を考える

昨秋、前91号をお届けしたゲスト会員から、私たちの各種活動への一定の評価とともに、提言やご質問をいただきました。改めて現地の現況確認の機会をいただけたことに感謝し、以下、皆様と共有させていただきます。

＜提言＞　ビラーン民族もイスラムであるならば、教育支援事業の中で、互いの宗教に対する寛容さを子どもたちに教えてほしい

まずビラーンの宗教ですが、ビラーンだけでなく、チボリやマノボなどLumad(ルマド)と総称する先住民族の、それも私たちが活動の中でかかわる地域の宗教について触れてみたいと思います。

これらの地域では、1960年代からCMB（現CMIP）やSCMSI等の、今は私たちの教育支援パートナーであるカトリック宣教会が学校や教会を作ったため、精霊信仰（アニミズム）だったルマドの間にキリスト教が伝わりました。特にSCMSIが30余りの学校（現6校）を作ったチボリ民族の町レイクセブではキリスト教が浸透しました。一方、両者は伝統的価値観を含む民族文化継承に力を入れ、アニミズム信仰も広く残っています。

また、SCMSI校里子担当のようにイスラム教徒も少数います。しかし、その存在に違和感はありません。

一方、PIHSをパートナーとする医療事業は、ムスリムと総称されるサンギル等の、14世紀以降イスラムに改宗した民族が多い沿岸の村が対象で、ナプサさん他PIHSスタッフもイスラム教徒ですが、輸血が必要な患者に対して、CMIP経由で神学生に協力を求めるなど、宗教にこだわらない協力事例を聞いています。

「イスラムであるなら寛容を・・」は、IS等の過激派のイメージからもっともなご意見です。衣食を保証するゲリラは貧しい子どもたちには魅力ある職種です。私たちにできることは限られていますが、教育普及や収入向上支援等、イスラム過激派を含む武装勢力に子どもたちが参加しないですむ支援をしたいと思っています。

＜質問＞　民族や宗教対立による内乱がある地域での活動は何十年もかかるのでは？いつまで活動しますか？

マラウィ制圧にもかかわらず戒厳令延長を決めたと聞くと、ミンダナオはそんなに危ない地域なのかと心配になりますが、西部のムスリム自治区を中心に、単発的に武力衝突はあっても、ミンダナオ島全域が内乱状態に置かれているわけではありません。

確かにNGOが長年かけて積み上げてきたもの、特に環境保全や収入向上事業は、たった一日の武力衝突でも無に帰すことがあります。「平和」はすべての活動の前提であり、平和構築は活動の目的でもあります。

私たちの地域でも小さな事件はありました。8年ほど前、イスラムが多いスララ町クハンで、キリスト教徒の村長がイスラム住民に殺害され、報復を恐れたイスラム住民は、植えて間もない苗木を残して村を離れました。数か月後に帰還し、大きな被害はありませんでした。

また、活動のごく初期、ビラーンの村アトモロックに水道を引いた時、麓の入植者たちにパイプを切断されました。アトモロック住民は先祖伝来の土地を奪ったとして、ビサヤ人入植者と対立していた中での出来事です。

これら2件とも、直接の原因には土地をめぐる争いがありましたが、民族や宗教間のトラブルとも言えます。

一方で、先日、イスラム医療チームPIHSから、敬虔なカトリック教徒でビサヤ人の元CMIP助産師ジョジョさんに、新設の助産所の手伝いを依頼したという連絡を受けました。地域の母子医療のため、宗教や民族の違いを超えて働いていただけるとしたら嬉しいことです。

私たちが関わる2市3州のうち、2州は外務省の安全情報で渡航中止のレベル3になっています。内乱状態ではなくても、ニーズを正しく把握し、適正な事業を実施する上では支障となっています。いつまで続けますかのご質問に答えられる議論を今後進めたいと思っています。本年もどうぞよろしくお願いいたします。（山崎）